

KANAGAWA PHILHARMONIC ORCHESTRA [そのりて]

SONORITÉ

神奈川フィルハーモニー管弦楽団

2025-2026

みなとみらいシリーズ定期演奏会

第410回

2026年1月17日[土]

開演14:00|開場13:15

第411回

2026年2月21日[土]

開演14:00|開場13:15



横浜みなとみらいホール

大ホール



ファゴット首席奏者 鈴木一成の
ボーカル

みなとみらいシリーズ定期演奏会 第410回

横浜みなとみらいホール 大ホール | 2026年1月17日[土]

主催：
公益財団法人
神奈川フィルハーモニー
管弦楽団

共催：
神奈川県、横浜市

助成：
文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業
(公演創造活動)) |
独立行政法人
日本芸術文化振興会

協力：
日本音楽財団、
横浜みなとみらいホール
(公益財団法人
横浜市芸術文化振興財団)

特別協力：
日本財団



神奈川文化プログラム



日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION

Supported by



指揮

松本宗利音

Conductor MATSUMOTO Shurihito

ヴァイオリン

ジュゼッペ・ジッボーニ^b

Violin Giuseppe Gibboni

ゲスト・コンサートマスター

三浦章宏

Guest Concertmaster MIURA Akihiro

ビゼー(1838-1875)

序曲「祖国」Op.19 (約12分)

Georges Bizet / Patrie ouverture, Op.19

パガニーニ(1782-1840)

ヴァイオリン協奏曲第1番 ニ長調 Op.6^b (約35分)

Niccolò Paganini / Violin Concerto No.1 in D major, Op.6

- I. Allegro maestoso
- II. Adagio espressivo
- III. Rondo. Allegro spiritoso



休憩 / Intermission

メンデルスゾーン(1809-1847)

交響曲第4番 イ長調 Op.90「イタリア」(約30分)

Felix Mendelssohn / Symphony No.4 in A major, Op.90 "Italian"

- I. Allegro vivace
- II. Andante con moto
- III. Con moto moderato
- IV. Saltarello. Presto

プレコンサート(弦楽八重奏) 13:35～ 舞台上にて

※演奏時間は目安です。



指揮

松本宗利音

Conductor MATSUMOTO Shurihito

「目指す指揮は、失敗を恐れず作品と向き合った解釈をオーケストラに伝えること」と語り、その確かな構成力と瑞々しい感性で頭角を現している期待の新星。

2025年4月から大阪フィルハーモニー交響楽団指揮者に就任。

2019年から2022年まで札幌交響楽団指揮者として各地で共演を重ねた他、2020年に指揮研究員を務めていた東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の定期演奏会に、2021年に読売日本交響楽団名曲シリーズ、大阪フィルハーモニー交響楽団定期演奏会にデビューし堂々たる演奏を披露。山形交響楽団、仙台フィル、群馬交響楽団、東京交響楽団、新日本フィル、東京フィル、名古屋フィル、京都市交響楽団、関西フィル、大阪交響楽団、日本センチュリー交響楽団、九州交響楽団などからも次々に招かれ、共演を重ねている。2024/2025シーズンはNHK交響楽団にデビュー、好評を博した。

1993年生まれ、大阪府豊中市出身。京都堀川音楽高校を経て東京藝術大学音楽学部指揮科卒業。アカンサス賞受賞。指揮を尾高忠明、藏野雅彦、高関健、田中良和、ヴァイオリンを澤和樹、曾我部千恵子の各氏に師事。藝大在学中にはダグラス・ポストック、パーヴォ・ヤルヴィ両氏のマスタークラスを受講。

「しゅりひと宗利音」の名付け親は、20世紀の世界的指揮者カール・シューリヒトの夫人である。

ヴァイオリン

ジュゼッペ・ジッボーニ

Violin Giuseppe Gibboni



©Paolo Bibi

イタリア出身。14歳でクレモナのシュタウファー・アカデミーに入学、名手サルヴァトーレ・アッカルドからレッスンを受けた。シエナのキジアーナ音楽院を卒業後、ピエツラのアカデミア・ペロージでパヴェル・ベルマン、ザルツブルクのモーツアルテウム大学でピエール・アモイヤルに師事した。

2021年パガニーニ国際コンクールで優勝したほか、2016年アンドレア・ポスタッキーニ国際ヴァイオリン・コンクール、2017年レオニード・コーガン国際コンクール、2018年ジョルジュ・エネスコ国際コンクール、2020年ヴァルセージア国際音楽コンクールでそれぞれ優勝や上位入賞している。これまでに、ロレンツォ・ヴィオッティ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、ズービン・メータ指揮フィレンツェ五月音楽祭管、ディエゴ・チェレッタ指揮トスカーナ管、ジョエル・サンデルソン指揮ミラノ響、ヤデル・ビニャミーニ指揮デトロイト響、ダン・エッティンガー指揮ナポリ・サン・カルロ劇場管、ジョン・アクセルロッド指揮RAI国立響など世界の主要オーケストラ、指揮者と共演の他、イタリア各地で定期的によりサイタルを行う。15歳でワーナー・クラシックスからヴァイオリンの名曲を収録したデビューCDをリリースしている。

使用楽器は日本音楽財団から貸与されたストラディヴァリウス1722年製ヴァイオリン「ジュピター」。

協力

日本音楽財団

Nippon Music Foundation

日本音楽財団は、1974年に日本国内の音楽文化の振興と普及を目的として設立され、創立20年を迎えた1994年からは、西洋クラシック音楽を通じた国際貢献を目的として、弦楽器名器の貸与事業を行っている。保有する世界最高クラスの弦楽器21挺（ストラディヴァリウス製ヴァイオリン15挺、チェロ3挺、ヴィオラ1挺、ガールネリ・デル・ジェス製ヴァイオリン2挺）を若手有望演奏家や世界で活躍する演奏家に国籍を問わず無償で貸与し、同時に、これら世界の文化遺産ともいわれる名器を次世代に継承するための保守・保全を行っている。また、楽器被貸与者による演奏会を日本国内外で開催し、名器の音色に触れる機会を提供している。日本音楽財団の事業は、日本財団の全面的な支援により実施されている。

ストラディヴァリウス

1722年製ヴァイオリン「ジュピター」

Stradivarius 1722 Violin “Jupiter”

この楽器は、1800年頃にイギリスの収集家ジェームス・ゴディングによって「ジュピター」と名付けられたといわれている。歴代の所有者にはカンボセリーチェ公爵のほかW.E. ヒル&サンズ社、アマチュア奏者で医学の臨床教授のエフレイム・エンゲルマンが含まれる。大切に使用されてきたためオリジナルのニスが全体に残っており、保存状態の優れたストラディヴァリウス作の好例である。



楽器編成

・
フルート2
(ピッコロ持ち替え1)、
オーボエ2
(イングリッシュ・
ホルン持ち替え1)、
クラリネット2、
ファゴット2、
ホルン4、
トランペット2、
コルネット2、
トロンボーン3、
チューバ、
ティンパニ、
バスドラム、
シンバル、
トライアングル、
ハープ2、
弦五部
※スコア上の表記

ビゼー

序曲「祖国」Op.19

代表作であるオペラ『カルメン』(1873～75)が初演された3ヶ月後に36歳で急逝してしまったのが、フランスの作曲家ジョルジュ・ビゼー(1838～75)である。35歳で亡くなったモーツァルトと同じぐらい短い人生だったのだ。優れたピアニストでもあったのだが、作曲家としては舞台音楽に力を注いだ。そうした舞台作品から独立した演奏会用序曲は、若書きの序曲 イ長調(1855)とこの序曲「祖国」(1873)の2曲しか遺していない。

本作は指揮者ジュール・パドルーの依頼によって生まれた。ビゼー自身は劇的序曲と呼んでいたのだが、パドルーの判断で初演の際に「祖国」と名付けられ、初演されている。当時、普仏戦争(1870～71)でプロイセンに敗れたフランスではナショナリズム(愛国心)が高まっており、その流れに位置づけようとしたのだろう。ただ、ビゼーが『カルメン』と同時期に作曲していた未完の作品『ドン・ロドリゲ』の素材を一部転用しているそうで、この未完のオペラで描かれるはずだった、国家の威信と個人の愛のあいだで揺れる男女の物語のように聴こえなくもない。

パガニーニ

ヴァイオリン協奏曲第1番 ニ長調 Op.6

ベートーヴェン(1770～1827)が亡くなった翌年、音楽の都ウィーンに新たなスターがやってきた。それがイタリア出身のヴァイオリニスト、ニコロ・パガニーニ(1782～1840)である。左手はヴァイオリンの指板の上を正確無比かつ縦横無尽に駆け巡り、右手の弓使いによってこの世のものとは思えないほどの美しい音色を響かせると、家財道具を売ってまで演奏を聴きにきたシューベルト(1797～1828)は「天使の声が聴こえた!」と大絶賛。その後はドイツ、フランス、イギリスとヨーロッパ各国を巡り、シューマン、ショパン、リストといった作曲家たちにも多大な影響を与えていった。

楽器編成

・
フルート2、
オーボエ2、
クラリネット2、
ファゴット、
コントラファゴット、
ホルン2、
トランペット2、
トロンボーン3、
ティンパニ、
バスドラム、
シンバル、
弦五部、
独奏ヴァイオリン
※スコア上の表記

こうしたツアーのなかで演奏していた楽曲のひとつが、1815年に作曲されたこの協奏曲である。独奏ヴァイオリンから紡ぎ出される旋律線はコロラトゥーラ・ソプラノがオペラで歌うようなメロディに影響を受けており、パガニーニより年下ながら、先にイタリア国外で人気を得ていたオペラ作曲家ロッシーニ(1792～1868)を意識しているようだ。ヴァイオリンの超絶技巧によって更なる彩りを加えた結果、一聴して分かる通りの難曲となった。ちなみにパガニーニ本人は独奏ヴァイオリンの調弦を半音高くして変ホ長調で弾いていたが、オーケストラの方の楽譜を半音下げてニ長調で演奏するのが一般的である。

第1楽章 ソナタ形式に沿って作曲されている、演奏時間にして作品全体の半分以上を占める楽章。提示部の1周目は管弦楽のみ、2周目でヴァイオリン独奏が加わって主題を技巧的に変奏したり、抒情的にたつぷりと歌い込んだりしていく。ヴァイオリン独奏による高音のトリルに導かれて、管弦楽だけでクライマックスを一旦迎えた後、再び独奏が登場すると展開部に突入。技巧は更に冴え渡り、メロディは哀愁豊かにむせび泣く。再現部のあとに控えるヴァイオリン独奏だけで奏されるカデンツァについて、本日の独奏者ジッポーニはエミール・ソーレ(1852～1920)が作曲したカデンツァをカットなしで演奏することが多い。

第2楽章 前半は悲哀に満ちた短調のメロディが先導していく。後半には抒情性を保ちながらも明るい響きに転じるが、終盤で再び影が差す。

第3楽章 軽快なロンド。冒頭のロンド主題が何度も登場するあいだに、性格の異なる音楽が挟み込まれていく。ヴァイオリン独奏は高音の輝かしいパッセージが多いのが特徴だ。

メンデルスゾーン

交響曲第4番 イ長調 Op.90「イタリア」

ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)がウィーンで亡くなった年に、ドイツのハンブルクで生まれたのがフェリックス・メンデルスゾーン(1809～1847)である。ユダヤ人の家系だが、銀行を経営していた父アブ

楽器編成

フルート2、
オーボエ2、
クラリネット2、
ファゴット2、
ホルン2、
トランペット2、
ティンパニ、
弦五部
※スコア上の表記

ラハム(1776～1835)が今後はキリスト教の時代だと考えていたため、息子フェリックスはプロテスタントの教会で洗礼を受けた。

しかし父母どちら側の祖父母からも良い顔をされず、親族からの求めで義理の弟(妻レアの弟ヤコブ)がキリスト教へ改宗後に名乗っていた姓バルトルディにしると迫られ、アブラハムはメンデルスゾーン＝バルトルディという二重姓を名乗りはじめた。ところがフェリックス自身は公式の場以外では二重姓をあまり用いず、ただフェリックス・メンデルスゾーンと署名し続けた。ややこしい話なのだが、こうした複雑な宗教との関わりがメンデルスゾーンのアイデンティティや価値観の根幹にあるのは間違いない。

1830年から翌年にかけてメンデルスゾーンは初めてイタリアを訪れたが、これも父アブラハムの強い意向だった。20代前半だった息子フェリックスにヨーロッパの重要な文化圏を旅行させ、古典に対する教養を深めることを求めたのだ。強制されたように思われるかもしれないが、メンデルスゾーンはこの旅行を大いに楽しみ、「人生最高の喜び!」と書き残している。ルネサンスやバロック美術の名画に触れるだけでなく、イタリアに滞在する多くの芸術家との交流も刺激になった。この旅行中に書き始めたのが本作だったが、完成には至らず。1832年秋にロンドンからの委嘱がきっかけとなって作曲を再開。1833年3月に完成し、5月に初演されている(なお1834年にメンデルスゾーンは2～4楽章の改訂が試みたが、うまくいかずに諦めたようだ)。

第1楽章 ソナタ形式。イタリアで感じた喜びを直接的に反映したかのような音楽。展開部では嵐が巻き起こる。

第2楽章 五部形式(A—B—A—B—A)による緩徐楽章。イタリアで見た宗教的な行列の印象がもとになっているという説が昔から語られてきたが、残念ながら確かな証拠は遺されていない。

第3楽章 三部形式(A—B—A)によるメヌエット風の楽章。終楽章がスケルツォのような性格をもっているので、この楽章には穏やかな音楽が置かれたのだろう。

第4楽章 ソナタ形式。第1楽章が長調であったのに、終楽章が短調という珍しい構成。イタリアの舞曲サルタレッロのリズムで、勢いよく劇的に走り抜けてゆく。